

# 『侵攻』

ポルメリアが異臭や血の臭いあふれる階上からリュイーズの亡骸を抱えて降りてきた時、下には戸惑いを隠せない衛兵や騎士たちが集まっていた。

階上でポルメリアが戦っている音を聞き、一体どんな様子なのか解らない為に突入を見送っているうちに、彼女が無言で降りてきたものだから、どう扱っていいのか解らないといった様子だ。

彼女の方は、そんな兵士たちの相手をするつもりはまったくなく、彼らが見守る中、たった一・二ヶ月の間とはいえ一緒に親しく過ごしてきたリュイーズを葬る場所を探すため中庭に出て行った。

そこでポルメリアは初めて白い花を咲かせる林檎を見つけた。夜風に吹かれて花びらが舞っている。

この根元がいい。リュイーズはきつと花となって咲き誇るだろう。そんな事を考えた彼女は鞘に入った愛剣を使って穴を掘り始めた。

「しばらく、お待ちいただきたい」

背中から声をかけられる。だがポルメリアは手を止めるつもりはなかった。

「なにか？」

「その亡骸は宰相大公閣下の直臣リュイーズ・ポントワですな」

「だから？」

「事情を説明していただけませんか？」

だがポルメリアの返事は素気なかった。

「悪いが忙しいのです。私は今から友の為に二つ墓穴を用意してやらねばならない」

「二つ？」

「あなた方が追い駆けていたクレドネエも死にました。罪状がどうあれ、彼は私が倒した私の友でした。私には彼を弔う権利があると思う」

「それまで待てと？」

「申し訳ないがそうしていただきたい」

背中越しに声の主が戸惑っている事が解る。だがすぐに別の野太い男の声が明快に答えた。

「あいや解りもうした。戦友の墓を作るのは生き残った者の務め。

しかし我らにも事の顛末を主君に報告する務めがある。待たせてもらうが、いいかな？」

「・・・勝手になされるがいい」

そんな事は今のポルメリアにはどうでも良かった。垂れ下がる金色の前髪をかきあげ、掘りにくい愛剣で一刻も早くリュイーズに終の住処をつくってやりたかった。

そんな時、派手な音を立てて足元に鉄製の鋤が転がった。訝しげに振り返ると完全武装した髭面の巨漢が立っている。

「お使いなさい。剣をそんな風に扱うのは冒瀆ですぞ。手間もかかるしな」

「・・・ありがとう。貴方は？」

「ワシはオウエスマーレ騎士団アンゲルウルプ分遣隊長ゲルマルクと申す。『城砦落とし』殿か？」

巨漢の騎士は面白そうにポルメリアを眺めている。だが彼女には相手をするつもりがない。鋤を拾って墓穴掘りを再開する。

「ええ」

「噂には聞いていたが、本当に少女だったのだな。しかも華奢で小柄だ。とても城一つ落とす女丈夫には見えんな」

「それで？」

「なに、それだけさ。ただの感想だよ。

ああ、それから、一つ言っておくが三階で碎けている死体がクレドネエなら、奴は重罪人だ。死体に極刑加えてさらさねばならん」

ゲルマルクの言葉には他意はなさそうだ。というよりも声の調子は明るく嫌味を言っているようでもない。

だがポルメリアは彼の言葉に眉を顰めた。

「死者に鞭打つとおっしゃるのか」

「それが法というものだ」

「だが彼が暗殺の犯人であった確証はない」

「貴公が殺してしまったから、自白させる事もできないな」

ゲルマルクの体毛は赤味がかった金髪だ。朱色といった方が近いだろうか。

その明るい色の髭と対照的に赤銅色の肌はやや暗い。明るい髭の中に暗い色の指を突っ込み、ポリポリと掻いている。明るい青い瞳が楽しそうに不機嫌なポルメリアを見ている。

「何をおっしゃりたい」

手を休めた彼女がゲルマルクを睨む。

「クレドネエの死体を引き渡して欲しいという事だ。それでまあ、気が済む連中がいるのでね」

ゲルマルクは相変わらず緊張感のない態度で話す。しかし彼の言葉に応じられる彼女ではなかった。

「お断りする。死者を侮辱する為に、引き渡せる筈がない」

「力づくが通じると思っているのかい？あんたは一人だ。こっちは騎士が十人はいるぞ」

「それでも、友の尊厳は守らなければならない」

ポルメリアは鋤を落として愛剣の柄に手をかけた。

ゲルマルクの背後に控えていた騎士たちも、それぞれの武器を構えようとする。

だが彼らの緊張を吹き飛ばすように爆笑したのはゲルマルクだった。

ポルメリアはおるか配下の騎士たちすら呆気に取られる中、ゲルマルクは腹を抱えて笑い続けた。

「あー、おかしかった。本当に噂通りの朴念仁なんだな、あんたは。」

自分と同等の力量を持つかも知れない相手が十人もいるのに、それでも我を通すのか。本当に馬鹿だな」

言われてポルメリアの機嫌が直る筈はない。だがゲルマルクは構わずに言った。

「しかしどういう訳か、俺は馬鹿が好きでね。あんたは心ゆくまで友人の墓を掘ればいい。俺達はそれを見届けよう。なあに、言い訳なんていくらでもできるさ。俺だって死者を冒瀆するような真似はしたくないからな」

「・・・ありがとう、と言うべきなのかな？」

複雑そうな顔のポルメリアが戸惑いながらも武器を下ろす騎士達を見た後、ゲルマルクにそう問いかけた。

「礼を言われるような事はないさ。ただ、あんたには事の顛末を説明する義務がある。それには付き合ってもらおうさ」

そう言うと、ゲルマルクは中庭に転がる石にどつかと腰を下ろし、鎧こそ脱がなかったが寛いだ様子になってしまった。

「解っています。義務は果たします」

ゲルマルクの言葉で墓穴掘りに戻ったポルメリアは、急に緊張感が遠のいていくのを感じた。

張り詰めた気が緩んでいくのと同時に、腫の涙腺が緩んでいくのが解る。

「ほ。林檎の花も、そろそろ見頃は終わりかな」

脳天気なゲルマルクの声を聞きながら、舞い散る白い花びらを避けながら、掘り返した湿った土の匂いを感じながら、声を殺して彼女は泣いた。

私はまた、友の墓を掘っている。私だけが、また生き残っている。

その事が無性に悲しかった。

真新しい巨大な城壁に囲まれたメルクスは、安らかな眠りについていて。

中原の戦乱をよそに、ここは豊かで平和だった。難民たちにも家を与えられるし、それに自分達の手で建築した堅固な城壁が自分達をしっかりと守ってくれている。そんな安心感がメルクス市民にはあった。

外郭の城壁も先頃完成し、公爵を招いての落成式と祝賀祭も華やかに行われた。

人々は日没以降も飲み、食い、騒ぎ、ようやく彼らが寝静まったのは夜半を過ぎた頃だった。

「ようやく皆寝てしまったようだね・・・」

『ワーム』が欠伸を噛み殺しながらメルクスの街の中心部、同心円状の真ん中に新しく建てられた塔の最上階に立っている。

新たに拡張された大メルクス市を象徴する『繁栄の塔』と市民が呼んでいるそれは、物見塔であり鐘撞き塔として建てられた。

日中は見張りの兵士と時刻を知らせる時の神の神官が常駐しているが、

兵士も神官も夜明けにならなければ塔の最上階にはこない。

『ワーム』の傍らには、青白い顔に達成感による笑みを満足そうに浮かべた召喚術師が立っていた。

「ようやくこの時が来ました」

「長かったねえ」

そんなに感情をこめずに肩を叩きながら投げやりな調子で言う『ワーム』。不熱心な彼とは対照的に召喚術師は興奮していた。何しろ、今夜、彼の満願は成就されるのだから。

「準備は全て整いました。後は貴方の呪文だけです」

「そうなんだよねえ」

召喚術師の興奮と裏腹に赤毛の少年はいまいち乗らない様子だ。

「どうかされたのですか？」

「いやぁ・・・これからあの呪文を唱えなきゃならないかと思うと・・・かつたるくてねえ。

誰か代わりにやってくれないかなぁ・・・そうだ！君、僕の変わりに唱えてよ」

いかにもいい思いつきと明るい笑顔で『ワーム』は振り返る。だが召喚術師は激しく首を振った。

「たった一体の悪魔を呼び出すだけでも複雑な呪文を詠唱しなければなりませんのに、地獄と次元を直通させる穴など、自分ではとても・・・」

「三十万人からの魂を生贄に捧げるんだから、簡単じゃない」

事もなげに言う『ワーム』だが召喚術師は青くなって首を振り続けた。

「無茶を言わんで下さい。次元の穴を開通させながら三十万人の命を奪うなど、私では不可能です！」

「なんだ、そうなんだ」

がっかりした『ワーム』は口の中で使えないなぁ、と呟いたが、それは召喚術師の耳には入っていないようだ。

「しょうがない。やるとするか。面倒くさいけど。」

君はそこから離れないようにしなよ。でないと思つて魂を吸い取ってしまうからね」

そういうと、『ワーム』は街全体を見下ろす場所に立ち、激しい複雑な身振り手振りと同時に、人間の耳では聞き取れないような速さで高速詠唱を開始した。

と、同時に城壁の下に、中に巧妙に隠され立体的な図案化がなされた魔法陣が光り始める。

二重の城壁で描かれた巨大魔法陣が起動する。

これだけの魔法陣を建造しながら起動する事はできない召喚術師にも、眼下で何が起きているのかは理解できた。

今地上では魔法陣から濃密な魔素が溢れ出している。

一般人はそれに触れるだけで即死するという代物だ。

お祭り騒ぎで疲れ果て、眠りこけている人々は騒ぎ立てず、大した苦痛もなしに命を奪われていくだろう。

悪魔にとつて魂は、安らかな死を迎えたものよりも苦痛や絶望や憎悪に塗れていた方が価値がある。だが城壁内だけで二十万人を越す人々を速やかに抹殺しなければならぬのだ。

手間隙かけて時間を浪費して、余計な採め事を増やすつもりがさらさらぬい『ワーム』は質よりも量を取った。

一度に二十万の魂を刈り取る事など、今までどんな上級悪魔も、いや地獄の諸君主すらやった事はないだろう。それだけの魂を使えば、何でもできる。地獄の諸君主を越える力を手に入れる事さえも・・・

その考えに思い至った時、

召喚術師は初めて面倒くさそうに呪文を高速詠唱中の『ワーム』が浮かべている微笑の真の意味を理解したような気がした。

彼は今、圧倒的な力を手に入れたつあるのだ。笑いが止まらないとはこの事なのではないか？

阿鼻叫喚もなしで訪れた二十万人を越える人々の死。『ワーム』の呪文とともにメルクス市自体が深淵の闇に沈んだ。残されたのは彼らが立っている鐘楼のみだ。

何時の間にか詠唱は終わっていた。深淵の遙か彼方に赤い光が見えるのは気のせいだろうか？おそらく穴は地獄の、『ワーム』が故郷とする火炎の階層と繋がったのだろう。

「待たせたねえ。僕の下僕たち。何百年ぶりだろうか。ようやくの出番だよ」

『ワーム』の言葉にこたえるように地響きが轟いた。その振動でメルクス城外に住んでいた難民達は目を覚ましたらしい。昨日まで自分達が作り、自分達を守ってくれる筈の頼もしい城壁が消えている。それどころか、繁栄の極みにあると思っていたメルクス市自体がなくなっている！

驚愕、混乱、恐怖に震える人々に追い討ちをかけるように、巨大な穴から地獄が溢れた。

それは奔流となった異形の群れだった。どれもこれも、殺戮や破壊の楽しみに胸躍らせて歓喜の叫びをあげていた。いや、違う。彼らにとつてそれらは魂狩りなのだ。

悪魔以外の全ての存在は自分達が刈り取り収穫すべき麦穂であり、狩り立てて仕留める為の獲物に過ぎないのだ。

昆虫に擬された者、爬虫類に似ている者、獣になぞらえられた者。しかしそのいずれでもない他次元の怪物が難民たちに襲い掛かる。戦いにはならない。殺戮でもない。それは宴だった。悪魔たちの宴だった。

「あー、疲れた。まあこれで一段落ついたなあ。さあて次の仕事だけど・・・」

大仰に安堵の溜め息をついた『ワーム』は部下達のはしゃぎようには興味がないようだった。

しかも巨大な次元の通路を開設した事実さえ、もう過ぎ去った過去にしてしまいそうな気配だ。召喚術師は慌てていった。

「お待ちを『ワーム』！事は成りました。約束の報酬をいただきどう存じます」

「報酬？」

怪訝そうな顔の少年を見て召喚術師は慌てる。

「成功の暁には、私を上級悪魔に転生していただけると！」

「あー、そうだったねえ。うんうん。これから大戦が始まるからねえ。悪魔手はいくらあっても足りないからねえ」

「それならば尚のこと、私を！これからも貴方の忠実なる下僕として働いてご覧にいます」

「そう。んじゃよろしく頼むよ」

だが『ワーム』が指を鳴らした瞬間、召喚術師が変化したものは、最下級のインプだった。幾許かの魔法は使える。だが体の大きさは人間だった頃の四分の一ほど。まったく非力な存在だ。召喚術師だった頃、この程度の悪魔ならば何度も召喚した事がある。

彼は我が身に降りかかった出来事を、しばらく理解できなかった。

「な、な、なっ！これは一体どういう事です！？」

「だってさー、元から実力の足りない魂を底上げするのって大変なんだよ？悪魔手は必要だけど、地獄との直通路が開いちゃったんだから呼び放題じゃない？」

あえて君をそこまでして上級悪魔に取り立てるメリットっていうのが僕にはないよねえー」

かったるそうに言う『ワーム』だが口元には皮肉な笑みが浮んでいた。

「騙したのか。俺を散々こき使って、騙したのか！」

インプの姿で激昂した彼だが、しかし珍しく真剣な表情で彼の前に指を突き出した『ワーム』の言葉に絶句した。

「書面を見せてみなよ。『事が成った暁には、君を上級悪魔に取り立てる』と明記した、僕の自筆のサイン入りの書面を、だよ」  
言われてみれば、そんな契約を書面を起して交わした覚えがない。全て口約束でしかない。

「悪魔との契約を口約束だけで交わすなんて、豪胆というか迂闊というか・・・いや、間抜けというべきかな？」

絶望的な悲鳴をインプが上げた瞬間、巨大な炎の塊のようなものが降ってきた。その身に地獄の業火をまとわせる真正正銘の上級悪魔たちだ。彼らが発する炎を受けただけでインプは蒸発するように燃え尽きてしまった。

「あ、ごめん。僕は地獄の先触れだけど、厳密に言ったら悪魔じゃなかったんだ・・・って、もう死んじゃったか」  
独り言のように呟く『ワーム』を、不思議そうに巨大な五人の上級悪魔が見下ろしている。

「なにか？」

「いや、何にも。悪魔との契約に書面とサインを必須だが、龍との契約にはどうなのか、と。ちょっと考えてみただけ」  
「守っても利益を得ない契約など、破棄して当然ですな」

配下の上級悪魔に事もなげに言われて、『ワーム』は感嘆の声をあげて納得した。

「なるほど。素晴らしい論理だ。流石は我が精鋭たち」

にっこりと笑う『ワーム』の姿は赤毛の無邪気な少年のままだ。

それに向かつて頭を下げる筋骨隆々とした巨大な五人の悪魔達。シニールな場面だった。

「閣下の配下、五個軍団全て、召集により参上しました」

地獄には六百六十六の軍団が存在するという。一個軍団には約六千の悪魔たちが属している。単純に計算して『ワーム』には三万の悪魔が配下として存在するわけだ。

「穴の周辺には十万あまりの魂がたむろしていただろう？僕からの振る舞いだ。喜んでくれたかな？」

子供が友人に贈り物をしたような嬉々とした表情で『ワーム』は言う。

「はい。堪能しております」

三万の悪魔を代表して一人が答える。上機嫌の『ワーム』は続けた。

「それでは続けて次の行動に移ってもらおう。テッラムリアの『天使王国』には約三百の諸侯がいる。大半は取るに足らない存在だが五十あまりの大諸侯が核になって組織化されると厄介だ。彼らの拠点を示す座標は全て調べてある。これより精鋭のみを選抜して奇襲攻撃をかけよ。指揮中枢さえ破壊してしまえば、これからの戦い、楽になる」

「了解しました。思う存分地獄の炎を味わってもらいましょう」

五人の上級悪魔は不敵な笑みを浮かべて、来た時と同じように炎の塊と成って飛び去っていく。それを見送ると『ワーム』は鐘楼の影に向かって呼びかけた。

「ルポレット！」

「御前に」

現れたのは狼の頭を持った長いローブを身にまとった悪魔だった。

こちらはどう見ても人間の大人と大して変わらない体の大きさをしている。

先ほどの上級悪魔たちに比べても威圧感があるようには見えない。

だが彼は他の悪魔に比べて『ワーム』にとつては別物なのだろう。

「在地の諸族を召集して補助戦力を組織しろ。蹂躞するだけなら三万でも事足りるが、征服、攻撃拠点をつくるとなると・・・」

「足りませんな」

慥やかな面持ちでルポレットは長衣の裾から書面の束を持ち出した。

「諸君主方の主力は天使方の反抗作戦に対応中で動けないとのこと。

むしろこちらで敵後方を攪乱する事を期待していらっしやいますな」

「表向きはね。本音はどうか？」

「素直に閣下を援助されるとお思いですか？悪魔の中の悪魔である諸君主方が」

「思わないね。援助には見返りが必要だなあ」

「この世界は比較的魂に満ちています。これらを刈り取って諸君主方へ付け届けをすれば、心証は良くなりますが？」

「んー、試してもいないうちから負けを認めているようで気に入らないなあ」

「では、当座はこの戦力で戦いますか」

「奇襲の効果を最大限に生かせば、いいところまでいけると思うよ。連中、僕がばら撒いた不和の種で即応する態勢になっていない。諸侯の足並みが揃わないうちに戦果を拡大しよう。」

天使の軍団がこちらに注意を向けるまでが勝負だな」

「御意」

「では仕事にかかってくれ。有象無象の人間諸侯を 掃討する為には、補助戦力はいくらあっても足りない」

「承知しました」

ルポレットは現れた時と同じように影に消えていく。

『ワーム』を既にそれを見ていなかった。ニコニコと満足そうに笑いながら、殺戮の狂宴を楽しむ悪魔の軍勢を眺めている。

「さて、ここまででは上手く行ったと。後は、まあ、なるようになれだねえ」

元よりさして勤勉な性格とは言えない『ワーム』であったが、数百年越しの計略が成功したとなれば嬉しくない筈はないし、達成感がない筈もない。

とりあえずの成果で地獄の諸君主たちも納得するだろう。

手に入れた魂を温存したまま戦果を拡大すれば、彼らの一人と取って代わる事すら可能になるだろう。

世の中はなるようになるものだ。それが『ワーム』の本音だ。

そしてより巨大な権力がその手に転がり込むように、『なる』のも悪魔としての楽しみの一つだった。本当は龍の一族に連なる存在なのだが。

「何はともあれ、戦争を楽しむだけさ」

眼下に出現した地獄を眺めながら、『ワーム』はゆったりと呟いた。戦争という尊大なゲームを楽しむ愉悅を、味わいながら。

アンゲルウルプの廃墟にボルメリアがリュイーズとクレドネエを葬り終え、オヴェスマール騎士団のゲルマルク騎士長に伴われて

彼女がフォリヴァス宰相大公の執政宮殿へ向かったのは夜も更けた頃だった。

本来なら翌日に尋問を回すのだろうが、南方の雄オウルバイン家は、どうやらヤニース家の手引きで大軍を中原に送り込もうとしているらしい。

彼らを迎え撃つ為には、一刻も早くどちらにつくか形勢眺めをしようとしている中立派の諸侯を味方に引き込み、軍を編成しなければならぬ。フォリヴァス家としては猶予の時間などない。全てが時間との戦いになっているのだ。

その為、深夜近くでありながら、ボルメリアへの尋問に、お歴々はおるか宰相大公その人すら立ち会うという。

その事についてボルメリアは少しばかり不思議な感概を覚えた。友人であったリュイーズは平民出身だ。

その彼女を取り立て、そして彼女自身も大公の為に命を投げ出して働いていた。

友人の恩人にして全てを捧げられた主君と会うというのは、奇妙なものだと思うのだ。

宰相大公の夢と野心は、『天使王国』をフォリヴァスの名の下に統一する事だった。

統一によって平和がもたらされるならば、こんないい事はないだろう。

だがフォリヴァスと対立する諸侯はことごとく戦いを余儀なくされる。

戦いによって家を、畑を、放牧地を、家族を失い人々は流浪するだろう。

その事を考えるとボルメリアはリュイーズほど手放しに宰相大公を認める事はできなかった。

リュイーズが命をかけた宰相大公の野心に、私は嫉妬しているのかも知れない。

ボルメリアは自分の中で、その奇妙な感概についてそう結論付けた。そして溜め息をついた。

ままならないものだ。

リュイーズが死んでしまった今、そんな事を思っても仕方ないというのに……。

宰相宮殿は、もしかしたら巨大な廃墟であるアングルウルプの中で、

唯一『天使王国』時代の風情が生き残っている建物なのかも知れない。

荘厳で清々しく美しい雰囲気は、他の諸侯の城や宮殿にはないものだ。

だがふと、彼女は宮殿の回廊を歩きながら場にそぐわない違和感を覚えて立ち止まった。

天使たち所縁の時代に作られた建物の中で、何か、こう、異質なものが紛れ込んでくる。そんな気配を感じていた。

そういえば、『地獄の先触れ』と称する『ワーム』は、一体何を画策していたのだろうか？ボルメリアが絡むとややこしい事になる。

だから彼女を遠ざける為に策を弄したと言っていた。

『地獄の先触れ』が企む事……それはもはや！

「どうかされたかな、『城砦落とし』殿」

ゲルマルクが首を傾げている。同時に回廊の行く手で激しい振動と爆音が轟いた。

ゲルマルクを始めとする騎士たちには何が起きたのか理解できない。

ただ執政宮殿の奥、ボルメリアの尋問が行われるであろう場所で火柱が立った時、彼女は瞬時に理解した。

『地獄の先触れ』が企む事。それは悪魔たちの侵攻以外に何かがあるというのだ。

その時には愛剣を抜いた彼女は走り出していた。呆気に取られていたオヴェスマーレの騎士たちも後に続く。

火の粉が見える煙を潜り抜け、焼け焦げ吹き飛ばされた扉を抜けると、そこには炎で焼かれた広間があった。

元は壮重な雰囲気の間であっただろうそこは、紅蓮の炎に嘗め尽くされ見る影もなかった。

何人かの黒焦げになった死体も転がっている。広間の中央には硫黄の息を吐き出す炎の巨人が立っていた。

背中には蝙蝠のような羽が生えている。隆々とした筋肉の山は、それだけで暴力的だ。

初めて実物を見た事になる。しかしボルメリアは理解した。

これが敵だ。本来の、私の敵。強大な悪魔の姿だ。

悪魔はボルメリアに気付いていなかった。忌々しそうに玉座のあたりを見ている。

どうやらそこには古い防御魔法が掛かっているらしい。

数人の要人と騎士たちが、悪魔の魔力を寄せ付けない玉座に集まり、防御を固めている。

「夢もなく恐れもなく、ひたすら剣を持って悪を撃つ」

小さく己の信条を呟いた彼女は、最初の一撃に自分が持てる全ての力を注ぎ込んだ。巨大な上級悪魔と比較すればポルメリアは小人のようだ。

だが彼女の一撃は悪魔の不意をうち、広間の向こう側へ弾き飛ばしていた。

玉座の辺りから歓声上がる。ポルメリアはそれを聞いていなかった。

不意打ちされた悪魔が怒りに燃え、炎の大剣を抜き、同時に炎の呪文を投げてくる。

ポルメリアの魔法防御を貫通してくる。だが炎に包まれても彼女は怯まなかった。焼け爛れても高速治癒が傷を癒す。

雄叫びとともに打ち下ろされる彼女の愛剣。悪魔の大剣がそれを受け止める。

が、その最初の一撃で炎の大剣が碎かれるとは上級悪魔と言えども思いもよらなかったようだ。

ポルメリアは最初から悪魔の武器を打ち砕く事を狙っていた。悪魔は巨大な拳を振るってポルメリアに殴りかかる。彼女の浮遊盾がそれをいなす。すかさず彼女の剣が悪魔の腕に切りかかる。

悪魔は痛みあまりに憎悪の咆哮を上げた。空気が振動する。生き残った人々が恐怖する。

だがポルメリアは怯まない。恐れを忘れた彼女は善なる軍神の使徒。まさに悪魔と戦うための戦士。

満身の力を込めた一刀が悪魔の胴体を捉えた。チリチリと火花を散らして、悪を滅ぼす刃が切り裂こうとする。

巨大な拳を組み、悪魔も満身の力を振り絞ってポルメリアの頭上に、彼女を叩き潰す為に、降々たる筋肉を唸らせて、その拳を振り下ろす。しかし受け止めたのはまたしても浮遊盾だった。

「せい、はああああー！」

彼女の絶叫とともに刃が悪魔の胴体を真っ二つに切り裂いた。悪魔は信じ難いものを見るようにポルメリアを見た。そして断末魔の咆哮を上げ、煙のように消えてしまった。まるで悪い夢であったように。

後に残ったのは悪魔に殺されたり、恐怖にさらされたりした人々ばかりだった。

生き残った事を喜ぶよりも、体の震えが止まらぬ人々にとつて、

淡い光に包まれながら見事に悪魔を打ち滅ぼしたポルメリアの姿は、天使の再来にしか見えなかった。

だが、そんな中で冷静さを失わない者もいるようだ。その声の主は、煤で汚れていても恐怖に怯えてなどいなかった。

「助けてもらって礼を言う。だが君は何者なのだ？」

男は三十代半ばに見えた。煤で汚れていたが身につけているものは一際あでやかで豪華なものに見える。

「貴方は・・・宰相大公閣下ですか？」

ポルメリアの質問に男は鷹揚にうなずいた。

「確かに私はカシユール・フォリヴァスだが・・・もしや、君が『城砦落とし』なのか？」

「はい。ポルメリア・ランキンと申します。閣下」

「驚いたな。本当にこんな少女だったとはな。だが認めなければなるまい。あの悪魔を倒したのは君なのだからな。

君は、何の躊躇いもなく飛び込んできて、あの悪魔と戦ったな。

ひよっとして、君は何かを知っているのかね？それは暗殺事件やポントワの死とも関係があるのかな？」  
探るような宰相大公の視線を正面から受け止めてポルメリアはうなずいた。

「恐らく、全ては繋がっているでしょう。事件の裏には『地獄の先触れ』と称する『ワーム』という者がおります。かの者は策略を成就させたのでしょうか。その証が先ほどの悪魔です」

「その策略とは何だね？」

「地獄の軍勢を、この世界に解き放つ事です。閣下」

彼女に告げられた衝撃の事実が人々を混乱の渦に陥れようとしていた。戦争になる事は誰もが予測していた。しかしそれは人間の諸侯同士のものになる筈だった。それがどうだ。

他の次元からやってきた怪物、それも軍勢となった悪魔たちとの戦争だと？

信じられない。信じ難いのも無理はなかった。『天使王国』成立からこつち、人々は自分達の世界の中で、いわば内輪揉めに終始してきた。他の世界からやってくる脅威は、全て天使たちが跳ね除けていたのだから。天使がいなくなった二百年の間、人々の争いが頻発し激化の一途を辿っても、それはやはり内輪揉めだった。人々は見知った同じ世界の住人同士で争っていればよかったのだから。

それが今、まったく知らぬ世界からの侵略を告げられて動転しない方がおかしかった。

フォリヴァス家の廷臣たちは一様に騒ぎ出した。不安と絶望を露にする者。ポルメリアの言葉を激しく否定する者。

だが宰相大公と呼ばれるカシユール・フォリヴァスだけは何も言わずに、ただじっとポルメリアを見つめていた。ポルメリアもそんなカシユールの視線を正面から受け止めている。

騒がしいその場で、ただ二人だけが黙って互いを見つめている・・・いや、睨みあっている。その緊張感に気付いた者から徐々に口を閉ざし始めた。

「閣下！何をしておいでです。早急にこの場から退避しましょう。一刻も早く本国へ！」

不安にたまりかねた者が口火を切る。しかしそれに応ずるのは怒りに満ちた声だった。

「悪魔の軍勢など出まかせた。これはヤニースあたりが召喚術師を雇って宰相大公閣下を亡き者にしようとする陰謀だ！閣下。惑わされてはなりません。ヤニースに詰問の使者を。そして軍勢召集の下知を！」

カシユールはそのいずれにも答えなかった。彼はただ、彼女に対する質問を続けた。

「それで善なる軍神の使徒殿は、私に何をしろと言われる？」

「閣下は、閣下の成すべき事を成されるがよいのです。」

我が友リユーズは貴方の野心に賭けた。貴方が友の生涯を賭けるに相応しい人であると、私は願うばかりです」  
楽しそうにカシユールは尋ねた。

「善なる軍神の使徒は随分生臭い言葉を使うのだな。野心か・・・君は、私の野心を知っているのか？」

「『天使王国』を貴方の王冠の下に統一すること、でありましょう？」

「悪魔の軍勢が来襲してきて滅びに瀕している王国を取れというのか？」

カシユールは笑みさえ浮かべて質問を続ける。ポルメリアは生真面目に答えた。

「閣下、私達は生きています。今この瞬間、何万もの人々が悪魔の餌食になつていてでしょう。しかし滅びてはいません。彼らと戦う者がいるかぎり『天使王国』は存在するのです。貴方の野心が本物なら、これは好機とお考えになるのではありませんか？」

「危機を好機と言つのかね？」

「この戦いで閣下が主導権を握れば、諸侯はその実績を認めざる得ません。悪魔の侵略を撃退した英雄が王位につく事を誰が拒めるでしょう？」

あまりにも生真面目に返答を続けるポルメリア。  
そして最後の彼女の言葉を聞いてカシユールは思わず吹き出し、声を立てて笑った。

「しかし私には、天使の眷族と噂される君と違つて悪魔と戦う力などないぞ。悪魔殺しの英雄は君だろうか？」

「私は一介の兵士です。人々の剣として戦うだけのこと。閣下の本領は、そんな事ではありませんまい」

淡々と答えるポルメリア。その言葉を聞いてカシユールは改めて彼女を見つめ直した。

彼女は謙遜や卑下でそう言っているのではない。本当に、兵士として戦う事こそ自分に与えられた天命だと考えているのだ。  
カシユールは意地悪く笑った。

「君は随分と損な性分のようなだな。一生栄光というものとは無縁の生き方になる。しかし、それを受け入れているのか。それが天使の生き方なのかな？」

彼の質問に彼女は生真面目に答える。

「私は天使ではありません。善なる軍神の下僕。か弱き人々の剣。ただそれだけです」

「私のような腹黒い支配者にとっては、好都合な人材だという事だなっ」

愉快そうに喝破しカシユールは笑った。

廷臣たちはそれぞれ顔を見合わせている。

遅れて謁見の間に来て途中から二人のやりとりを見ていたゲルマルクはにやにや笑っている。しかし廷臣の多くは笑うどころではなかった。事の真相を掴んでいないのに、

主人はいきなり現れた少女騎士の戯言に答えて、戯言とも本音とも受け取れる剣呑な話をしている。カシユールの真意が何処にあるのか、廷臣たちにはさっぱり解りかねた。

そこへ、荒れ果てた謁見の間には似つかわしくない涼やかな少女の声が響いた。

「都市魔術師フィスエシルさま、ご来臨です」

煤だらけの人々が一斉に振り向いた。先触れのエルフの少女を二人従えて、光を放つ妙齢のエルフの娘がやってくる。廷臣たちが自然に頭を垂れたのには理由があった。

白いローブに身を包んだフィスエシルの背中には純白の、一對の翼がある。ポルメリアも息を飲んだ。

『天使の眷属』と呼ばれているが、彼女の体には天使の血など一滴も流れてはいない。父親はランキン侯爵だし、母親も特殊な神官の血筋とはいえ人間だ。

しかし彼女、フィスエシルは違う。

片親から天使の血を受け継いだ、本物の天使の末裔なのだ。つまり『天使王国』の、本来の支配者たちの末裔……。

「座所から出てくるとは珍しいな、『光の翼』どの?」

フィスエシルを前にして頭を下げていないのは傲岸なカシユールと戸惑うボルメリアだけだ。

カシユールは相変わらず楽しそうに笑った。

「ついに我が求愛を受ける気になったかな?」

カシユールの言葉に驚いたのはボルメリアだけのようだ。廷臣たちは身じろぎもしないし、エルフの少女たちも聞き流している。フィスエシルも鈴の音のような少し幼い笑い声をあげている。

「閣下は私の顔を見る度にそうおっしゃるのですね」

「何しろ歴代宰相たちの宿願だからな。その末席にいる自分としても求愛せざるをえまい」

「まあ、義務で求婚なさっているのですか」

「いやいや、そなたの見目麗しき姿と、そのエゲツない性格を知れば知るほど愛おしさは募るもの」

「相変わらずお上手ですこと」

カシユールとフィスエシルは微笑みを湛えて平和な歓談をしているが、生真面目なボルメリアからすれば求婚だの求愛だのもっと真剣に考え申し込むべき人生の重大事を、こんな軽口でやりとりしている二人に面食った様子だ。だからいきなり自分に話を振られると戸惑ってしまっ。

「こちらの可愛らしい方が先ほどの悪魔を撃退されたボルメリア・ランキン殿ですね?」

「はっ、はい!」

「王都アンゲルウルプを司る魔術師としてお礼を申し上げます。日頃この町の支配者面している面々がパニックに陥り、まったく何の役にも立たなかったのに。通りかがりの貴方が倒してくださらなければ、この傲岸な宰相どのと腰巾着たちは、全員、悪魔たちに魂を刈り取られていた事でしょう」

にこやかな口調で毒を吐くフィスエシルに廷臣たちは頭を下げながら鼻白み、あるいは恥じ入っている。だが一向に答えていないのはカシユールだった。

「いやいや、それもこれもアンゲルウルプを魔法的に守護する都市魔術師どのの手腕を信頼すればこそ」

「あら耳が痛い。数蛇だったかしら?しかし私も手だれの弟子を二人失いました。結界を破られた余波を私の代わりに受けたのです。可哀想な事をしました」

「ふむ。それはお悔やみ申し上げますぞ。それでこちらにお出でになられた用件は、まさかそれだけで?」

「暇を持て余しても物臭な私が、たった一つの用件で巷に出てくるとお思いですか？  
あなた方の不毛な論争を短縮してさしあげようと思って出てきましたのよ」

廷臣たちがざわめく。そしてフィスエシルの笑顔が消えた。

「遠くメルクスの都市一つが丸ごと消えました。代わりに巨大な次元を貫通する通路が生まれています。  
それを通って悪魔の軍勢が先ほど、テッラムリアに侵入しました。

王国宰相閣下、王国は、実に五百年ぶりに地獄からの侵略にさらされているのです。

ランキン殿がおっしゃる事は本当です。我が身に流れる天使の血潮に賭けて確約いたしましょう。

皆さん、思い惑い、言い争っている場合ではありません。この二百年間、王国は腐敗と内紛に明け暮れてきました。  
しかし今、本来の役割を果たさなければならない時が来たのです。

古き貴族の血筋を誇る方々、思い出して下さい。

あなた方のご先祖がいかにして天使達とともに、この世界を悪魔から守り抜いたのか。

新しき勇者よ。省みなさい。あなた方の背後に、いかに多くの寄る辺なき人々が救いの手を待ち望んでいるのか。

『天使王国』とは、即ち地獄からの侵略と戦うために作られし王国。

我らは共にその役割を担うために存在するのです。今こそ手を携え立ち上がるべき時です。

この世界から悪魔を追い払う為に！

…賢明なる閣下なら、ランキン殿のおっしゃる事がご理解できるはず。そして私は、世界を救った勇者に嫁ぐべきでしょう」

廷臣たちから驚きに満ちたどよめきが起こった。

カシユールとの会話通り、フィスエシルは数百年の間、歴代宰相たちの求愛を断り続けてきたのだ。

それが今、悪魔の侵略に立ち向かった勝利者に嫁ぐと初めて明言したのである。

呆気にとられているポルメリア以外の者が驚き慌てるのも無理はない。

だがカシユールの浮かべた笑みは単純な喜びではなかった。

「流石に、二百年間歴代宰相を手玉に取ってきた事はあるな。実に鮮やかだ。

私を地獄の供物に据える引き換えに、王国とそなた自身を報酬に差し出すか。危険だが、魅力的だな」

「閣下にはお断りになる自由がありますけれども？」

フィスエシルは悪戯っぽく笑う。カシユールは不敵な微笑で返した。

「そんな自由など持ち合わせない事を知っているくせに」

「どっういたしました」

フィスエシルのお辞儀を受け、カシユールは初めて自分の家臣たちに宣言した。

「これより『王国宰相』たる余は、王国全土のあらゆる諸侯に対して、  
地獄からの軍勢と戦うにあたり、与えられた全ての権限を行使する。

本来ならば『天使王国』の主権者たる天使達より付託されしものなれば、今は王都アンゲルウルプの都市魔術師にして天使の血を受け継ぐフィスエシルどのからの依頼をもってそれに代える。証人は貴公らと・・・そして『城砦落とし』ポルメリア・ランキン殿である。

このカシユール・フォリヴァス。『天使王国』創建時に天使達に協力し、人間たちを纏め上げたミシエル・バリバスの血を受け継ぐ者として、今ここに未曾有の危機に立ち向かう事を宣言する。諸侯よ、騎士よ、魔術師よ。神々に使える数多の者達よ。その宣誓を思い出し、侵略者たる悪魔を滅ぼす戦いに参加するのだ。彼らの、最後の一体を滅ぼすその日まで！」

炎に焦がされた謁見の間。黒焦げになった遺体が幾つも転がっている。生き残った廷臣たちとて先ほどの炎を操る悪魔の恐怖を忘れてはいないだろう。

だが知られる限り『天使王国』で唯一、天使の血筋を引くフィスエシルが戦いの勝利と引き換えに彼らの主カシユールに嫁ぐ事を約束したからには、この二百年間空位であった『天使王国』の玉座に彼らの主が座る可能性が生まれたのだ。

歴史的な壮挙であり、

そしてこの戦争に生き残ればカシユールの家臣たちは『天使王国』の王の直臣として高い地位と権力を得る事になるだろう。

そんな打算が頭をかすめなかったとは言えない。だが廷臣たちは主の宣言に対して、歓呼の声を上げて応じた。悪魔との戦いに赴くのが自らの意思であるかのように。

その場において、ポルメリアはもう主役ではなかった。

カシユールに決断させたのはフィスエシルであったし、悪魔を倒したのが彼女だけであったとしても、今の彼女はただの立会人でしかなかった。

だが、彼女にとってはその事はどうでも良い事なのだ。

野心家のフォリヴァス宰相大公を焼き付けて、『ワーム』が引き寄せた悪魔の軍勢と戦う旗頭に立てる事。それができれば良かったのだから。

ふと気配を感じると、音もなくフィスエシルがポルメリアの傍らに近づいていた。

悪戯っぽい笑みをエメラルドグリーンの瞳に浮かべて、フィスエシルはポルメリアの耳元で囁いた。

「今夜の宿は決まっていますしやるの？」

突然日常的な事を尋ねられて驚くポルメリアは反射的に、いいえと答えるのが精一杯だった。

「なら、私のところへおいでなさいな。」

フォリヴァスの方々へ説明にいらつしやったのでしようけど、あの方たちも実体験なさったのですもの、もうお話は不要ですね。カシユール殿はこれから忙しくなります。お客さまの応対などできませんからね」

「しかし、お弟子の方が亡くなられたのでありましょう？？そのような時にご厄介になるのは・・・」

「善なる軍神の葬儀がどのようなものか存知ませんが、私たちエルフの甲いは荘厳に、そして陽気にやるものですわ。ご懸念には及びません」

断ろうにも無駄な事だとフィスエシルの顔を見てポルメリアは悟った。

王都アンゲルウルプを司る魔術師である彼女には、天使の血統である事を除いても、

悪戯好きな少女の風貌を持っていても、どこか人を支配する女王のような雰囲気がある。人の運命を律してきた人物の、有無を言わせない力があつた。

「お話を聞きたいのよ。生まれではなく運命として天使の力を手に入れた、貴女のお話を、ね」

戦争に興奮した人々の喧騒が耳にこだまする。悪魔との戦争が始まる。

戦いこそもつとも忌むべきものである筈なのに、ポルメリアは自分の体が喜びに満ちている事を感じていた。悪魔との戦い。それこそが軍神から与えられた自分の使命なのだ、悪魔と戦う力を与えられた体が悟っているのだ。

でも心は？私の意志はどうなのだろう。これが私の戦いなのだろうか？

ポルメリアには解らなかつた。だから自分が焚きつけたようなものなのに、人々の喧騒が何処か遠い存在であるように感じられてならなかつた。

遠い世界の出来事を肌で感じている。そんな違和感に彼女は戸惑っていた。